

一貫目の重さ

藤原 道夫

台風が関東沿岸に接近する可能性があるという予報を聞き、真夏の暑い昼頃、近くのスーパーに水を買いに出かけた。定番の「南アルプス天然水」2ℓ入りのボトルを2本求め、リュックに入れて担いで歩きだす。これは楽だ、と思ったのはつかの間、すぐに腰に負担を感じる。歩くにつれて左膝にも負荷がかかっていることを意識しはじめた。500mもない帰り道が遠く感じる。若い頃山に行っていた時には、凡そ20Kgの荷を背負って山道を歩いた。肩に荷が食い込むような重さは体験したが、腰に負担を感じた記憶はない。よくあんなことができたものだ、と今さらながら感心する。歩きながらさらに昔のことが浮かんできた。

終戦前後の一時期、一家で母方の郷里に滞在したことがあった。会津一宮がある町にあった。祖母が健在で、普段は長火鉢の脇にきっちりとした姿で座っていた。8歳の子供にも、これが実に様になっているように思えた。この婆さんが口うるさく5人の孫たちに行儀作法を指示していた。ある日のこと、その婆さんから「味噌を一貫目買ってきなさい」と使いに出了された。口答えはできない、黙って容器を受け取り、街の中に出かけた。どこをどう歩いたのか全く記憶にないのだが、一貫目の味噌を運んだことは確かだ。丸い容器に味噌一貫目を入れてもらい、これを風呂敷に包んで持ち運んだ。一貫目は、小学校3年生にとって決して軽い荷ではなかった。どのくらい歩いたのだろう、丸くて持ちにくい荷を持つ腕がだんだんくたびれていった。歯を食いしばってという程ではなかったにしろ、頑張っって荷を下に降ろすこともなく、家の裏口にたどり着いた。ほっとした瞬間だった。婆さんが現れてくしゃくしゃした顔でしきりに褒め言葉を言っていた。これが子供心に存外効いたのかもしれない、腕の疲れが吹き飛んだようだ。

その後父方の山村の実家に移ってからも、水運びや畑仕事の手伝いはよくやらされた。このようなことが結果的に自分の体力向上に役立ったのだ。

あれから随分と年月が流れた。今や一貫目より少々重い4ℓの水を、運びやすいように背負いながらよたよた歩く年寄りだ。こんなことをいつまでやっていられるのか、健康維持に役立つのかはたまた腰を痛める方向にゆくのか、あれこれ思いめぐらす。